

「発表したい」から始まったクラスの物語

～Show&tell が広げた子どもたちの世界～

園名

氏名

認可保育園こども芸術大学

志村 紗希

アドバンスゼミを受講するにあたり、私がこのテーマを選んだのは、個性豊かな4歳児17名と過ごした一年間の中で、保育者と子どもたちが共に一つのテーマを深めていく「プロジェクト」のような日々を経験したと感じたからである。子どもたちの「好き」や「やりたい」という気持ちを出発点に展開していった活動は、最終的に「モンスター図鑑」という形にまとまりを見せた。その過程には、葛藤や試行錯誤、対話、ひらめきの積み重ねがあり、まさに子どもたち自身が保育を主体的に展開していったような感覚があった。私はこの活動が、単発的な制作や遊びにとどまらず、なぜ年間を通して継続されたのかに関心を持った。そして「プロジェクト保育」として、そこにはどのような価値があったのかを探りたいと考えた。その意味を明らかにするためにも、背景にある子どもたちの姿や具体的なエピソードを丁寧に振り返り、深く掘り下げていきたいと思う。

はじめに

子どもの主体性や探究心を大切にする保育のあり方が注目される中で、「プロジェクト保育」と呼ばれる実践に関心が集まっている。子どもたちの興味関心を出発点とし、試行錯誤や対話を重ねながら学びを深めていくこのような保育は、単なる活動の積み重ねではなく、保育者と子どもが共に作り上げていくプロセスに大きな価値があると考えられる。

私は4歳児クラスでの1年間の実践を通して、子どもたちの主体的な関わりや保育者との対話を基盤とした活動の積み重ねが、「モンスター図鑑」というひとつの形に実を結んでいった過程に深い学びがあることを実感した。そこで、この実践を「プロジェクト保育」として捉え直し、その意義や子どもたちの姿、保育者のかかわりについて考察することを目的とする。

第1章 昨今「プロジェクト保育」になぜ関心が集まっているのか

「主体性」という言葉は今多くの保育現場で耳にする。「主体性の尊重」が現在とこれからの時代に欠かせないと多くの人を感じているからであると大豆生田啓友は言う。彼は「共主体」という新しい言葉を用い、子どもと大人がそれぞれの主体性を保ちながら互いに学び合い、共に成長する関係の大切さを述べている。また協同的な学びを支えるキーワードとして「対話」を挙げている。子ども同士の話し合いを通して、多様な見方や考え方を知り、時に葛藤を経ながら共通の目的を見出していく。そのプロセスこそが学びの本質であるというのである。保育者に求められるのは、子どもの言葉や姿に耳を傾け、共に考え、保育そのものを「対話の中で創り出す」姿勢である。さらに2017年の保育所保育指針の改訂で示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」では「協同性」が新たに位置付けられた。こうした背景の中でプロジェクト保育は「協同的な学び」を実現する保育のあり方として注目されている。子どもたちの「やりたい」という思いを出発点に友達や保育者との関わりの中で世界を広げていく、その過程にこそこれからの時代に求められる学びの姿があるといえる。

第2章 実践の概要

2-1：実践の場とクラスの特徴

【対象園について】 本園については、ホームページで以下のように紹介されている。こども芸術大学は“京都芸術大学”のキャンパス内にあり、ものを生み出し創る情熱とエネルギーを身近に感じられる場所に設置されている。自然に溶け込むよう建てられた園舎で、こどもたちは、想像の世界を広げ、「こどもこそ未来」をテーマにこどもが生まれなが

らにもっている自ら生きようとする力を育む保育を実践している。

【対象児】 4歳児 17名 【活動期間】 2022年4月～12月

【クラスの特徴】 子どもたちは好奇心旺盛で自己主張がはっきりしており、「自分の話をしたい」という思いが非常に強



写真-1 「図鑑で調べる子どもたち」

かった。朝の会では話が脱線するほど、ひらめいたことをすぐに言葉にし、友だちや保育者に伝えようとする姿が多く見られた。その一方で、他児の話を最後まで聴くことが難しく、「聴く姿勢」を育てることが課題であった。また、自分の考えを積極的に表現することから意見のぶつかり合いも頻繁に起こったが、そのやりとりの中で互いの思いを伝え合い、感情を共有しようとする姿も見られた。さらに、図鑑や絵本などから得た知識をもとに興味を広げ、疑問に思ったことを自分で調べたり、友だちや保育者に尋ねたりする姿が多くみられた。このように、子どもたちは豊かな発想力と探究心をもっており、「面白そう！」と思ったことに対して積極的に行動を起こすエネルギーに満ちているクラスであった。

2-2: 「Show&tell」との出会いと始まり

私がかつて勤務していたアメリカ・ニューヨークの日系幼稚園では、「Show&tell」という活動が日常的に行われていた。これは、自分の好きなものや関心のあることをクラスの仲間に紹介し、最後に質問に答えるという活動である。アメリカでは幼児教育から広く取り入れられており、話す・聞く・質問するというやりとりを通して、表現力やコミュニケーション能力、さらには自己肯定感を育むことができるとされている。

日常的にものづくりを楽しんでいる子どもたちから「作ったものをみんなの前で言いたい！」という声が上がったことをきっかけに、「Show&tell」を思い出した。子どもたちの「伝えたい」という思いを大切にしながら、この活動を4月後半からクラスに取り入れてみることにした。

2-3: 「Show&tell」の導入と初期の子どもたちの姿

「Show&tell」を取り入れてみたものの、初めからうまくいったわけではなかった。子どもたちは他児の話を聞くよりも「早く自分が話したい」という気持ちが強いので、「聴く姿勢」よりも「発表したい気持ち」が前面に出ていた。また当初は「素敵です



写真-2 「Show&tell」の様子

ね」などの感想が多く、質問はなかなか出てこなかったが、活動を進める中で子どもたちの姿に少しずつ変化が見られた。

2-4: 「Show&tell」の継続と子どもたちの変化

取り組みを始めて3週間ほど経つと、「どこで見つけたんですか?」「どうやって作ったんですか?」といった具体的な質問が聞かれるようになった。子どもたちは友達の発表を通して関心を広げ、「もっと知りたい」「聞いてみたい」という気持ちを言葉にできるようになっていったのである。さらに、園外の出来事でもその姿が見られた。大学内に作品を観に行ったときや、消防署の方が来園したときにも、相手に積極的に質問するようになったのである。活動を通して、子どもたちは「話す」力だけでなく、徐々にではあるが「聴く」姿勢や「対話する」姿勢を身につけていった。「Show&tell」の実践を通して感じたことは子どもたちが主体的に語り、友だちの話を聴き、考え、つながっていく過程そのものが保育の中での“対話的な学び”であり、言葉と関係性の成長につながっていたといえる。

第3章 「Show&tell」から広がったプロジェクトの展開

3-1: クラス活動のプロセス

このクラスでの活動は、一見すると様々なテーマや制作が並行して行われたように見える。しかし、その根底には常に「Show&tell」を通じた子どもたちとの「対話」と「子どもたちの“やりたい”から始まる」という共通の流れがあった。下の図は、4月から11月までの活動のプロセスを時系列で整理したものである。土の実験や創作活動、モンスターづくりなど一見別々に見える取り組みも、すべて子どもの興味や発見を基に展開しており、クラス全体が一つの大きなプロジェクトとしてつながっていた。

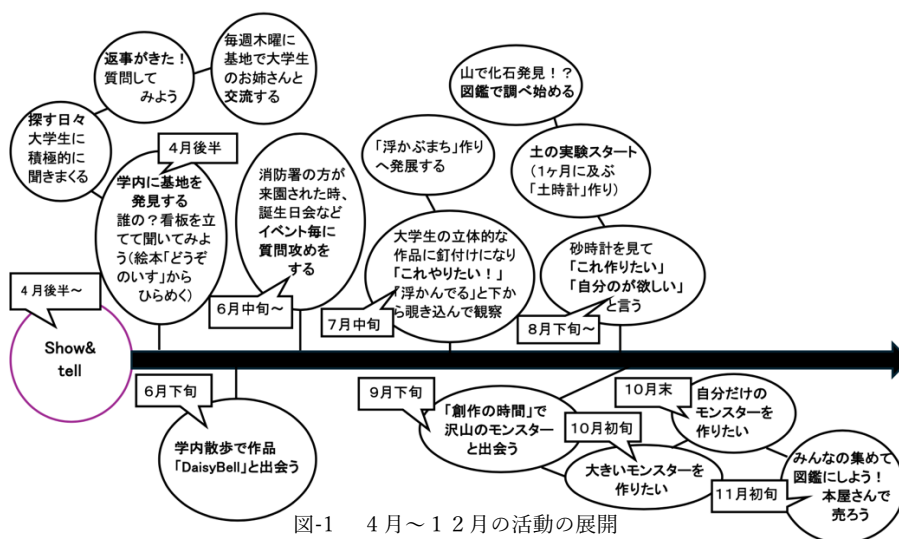


図-1 4月～11月の活動の展開

3-2 「やりたい」が広がった一年の背景

Show&tell の取り組みをきっかけに、クラスの子どもたちの「話したい」「伝えたい」という気持ちは、次第に「やってみたい」「表現したい」へと広がっていった。ある子の発言をきっかけに、誰のものか分からない学内の基地（学生制作）に看板を立ててみたり、完成まで1か月にも及んだ「土時計」をつくるために毎日実験を重ねたりと、日常の中に子ども発信の小さなプロジェクトがいくつも生まれていった。また、大学の中にある保育園という環境も、子どもたちの「やりたい」を後押しする大きな要因であった。園の周りにはアート作品や制作に取り組む学生の姿があり、子どもたちは日常的にその刺激を受けている。身近な作品や素材、表現に触れることで、大学という環境そのものが子どもの探究心を自然に引き出していた。

3-3 大学で作品「Daisy Bell」との出会い

6月、大学構内を歩いていた子どもたちは、ふと目に留まった巨大な作品「Daisy Bell」に強く惹きつけられた。「ゴリラだ!」「怪獣じゃない?」「犬にも見える!」子どもたちはその姿を前に、次々に想像を膨らませ、言葉を交わしていた。そんな中、偶然その作品の作者で



写真-3 「Daisy Bell との出会い」

ある大学の先生が通りかかり、子どもたちは自然と質問を投げかけ始めた。「これは何ですか?」「どうして作ったんですか?」「どうして膨らんでいるの?」それはまるで、日々の Show&tell の延長のような「対話の時間」だった。作者の先生は一つひとつの質問に丁寧に答えながら、「君たち、大学生よりいい質問するね」と笑顔で話して下さった。その言葉に、子どもたちは誇らしげな表情を見せ、ますます作品への関心を深めていった。けれどこの時点では、まだ「自分たちも作ってみたい」という思いには至っていない。ただ、この出会いは、子どもたちの中に「ものづくりへの好奇心」を芽生えさせるきっかけとなった。この偶然の出会いが、後に大きな展開を生み出すことになった。

3-4 : 作者との再会と「創作の時間」

9月末、「創作の時間」の講師として「Daisy Bell」の作者である先生があこの出会いをきっかけに園に来て下さることになった。テーマは「おとぎばなし・つくりばなし」。大学の中にある保育園ならではの取り組みであり、芸術表現を通



写真-4 「創作の時間で語る姿」

して想像し、親子で対話を楽しむことを大切にしている活動である。今回の活動では、先

生の数々のモンスター作品に贈る「ギフトボックス」を親子で制作した。制作後には「どんなものをどんな想いで贈りたいか」を発表し合い、それぞれの言葉や発想に互いが耳を傾けた。芸術作品に触れたこと、再びモンスターに触れたことで、子どもたちの興味も再び動き出し、「自分たちもモンスターを作りたい!」「あの箱をそのモンスターにプレゼントしたい」という声広がっていき創作への意欲が一気に高まったのである。

3-5: 自分たちのモンスター作り

制作の方法は、子どもたち自身が考え出した。「袋に新聞紙を入れたら、膨らむんじゃない?」「ガムテープで模様をつけたい!」「剣をつけたら強くなる!」と、アイデアが次々に飛び出し、思い思いの方法で形にしていった。手がべ



写真-5 「モンスター制作の様子」

たべたになっても、テープがうまくつかなくても、「うーん…でもここにつけたい」と工夫を続ける姿があった。失敗や試行錯誤を楽しみながら、子どもたちは互いに刺激を受け

合い、自分たちの思いを一つの形にしていった。こうして数日をかけ、2体のモンスターが完成した。完成後には「名前をつけよう!」という提案が出て、「エラゴン」「雪だるまモンスター」と名付けられた。自分たちの手で作ったことで、モンスターはぐっと「自分たちのもの」になり、子どもたちはその存在をまるで仲間のようにしていた。ちょうどその頃、園では親子運



写真-6 「運動遊びの日の一コマ」

動の日(運動会)が近づいていた。2体のモンスターと共に生活する中で愛着が深まっていた子どもたちは、「モンスターも一緒に出たい!」と言い出した。当日は、みんなの前でモンスターの名前を紹介し、親子リレーに「仲間」としてモンスターと共に参加した。子どもたちは誇らしげにモンスターを抱え、笑顔で走る姿を見せた。この経験は、「共に楽しむ」へとつながる、表現の広がりを感じさせる出来事となった。

3-6 自分だけのモンスター作り～個の表現への発展～

みんなで2体のモンスターを作り上げた経験は、子どもたちに大きな達成感と自信をもたらした。それと同時に、「もっと作ってみたい」「今度は一人でモンスターを作りたい!(自分のモンスターを作りたい)」という新たな意欲が自然と生まれてきた。そこには友達と協力し



写真-7 「自分だけのモンスター作り」

て作り上げた喜びを経たからこそ、個の表現への欲求が芽生えていたように感じられた。

「何がある？」と問いかけると、「画用紙」「折り紙」という答えが返ってきた。以前のよう
に立体的な素材ではなく、あえて身近な素材を自分たちで選んだのである。「あれを作り
たい」と大学の先生のモンスターをイメージしていた姿から「自分の世界を自分の手で表
したい」というイメージからの解放があったのではないだろうか。そこに、以前大学の先
生と一緒に取り組んだ「シャボン玉アート」でできた色とりどりの画用紙を加えておく
と、子どもたちはさらに創作意欲をかき立てられたようだった。制作が始まると、保育室
の空気が一変した。「こうしたい」と明確なイメージをもって作り進める子もいれば、偶然
できた形や色のにじみから思いつく子もいた。作る手は止まらず、子どもたちは思いつい
たことをすぐに形にしようとし、机の上には次々と「新しい世界」が広がっていった。

3-7 モンスターが動き出す瞬間～図鑑づくりへの展開～

モンスターがだんだん形になってきた頃、ある子がふと話し始めた。「先生、聞いて。こ
のモンスターね、片方のおててを使ってピョンピョン跳ぶんだよ。」それを聞いた私は、
「ちょっと待って、メモするから！」と慌ててペンを取った。するとその子は続けて、「大
きさはね…」「住んでるところは…」と、まるでそのモンスターが本当に生きているかの
ように話し始めた。その言葉をきっかけに、周囲の子どもたちも次々に話し出した。「先
生、私のモンスターはね…」「僕のはね…。あつという間に Show&tell のような空間に変
わり、子どもたちは互いの物語に耳を傾け、大笑いしながら自分の世界を語り合ってい
た。それぞれの言葉には、個々の経験や思いがにじんでおり、どのモンスターも「自分ら
しさ」に満ちていた。その多様さは、まるで一人ひとりの内面を映す鏡のようであった。
そして驚くべきことに、この時誰一人として「わからない」と手を止める子がいなかった
のである。「物語」が出てこない子も、誰かに「言わされる」子もいなかった。全員が自
分のイメージを持ち、それを自分の言葉で伝えたいという意欲に溢れていたのである。そ
れは、これまで積み重ねてきた Show&tell の経験が、子どもたち一人ひとりの中に「語る
力」として根づいていたことの証でもあった。

やがて子どもたちの「モンスターの世界」はどんどん広がって
いった。出来上がった作品を展示していると、それを眺めていた
子がふと「みんなのモンスターをコピーして本にして、本屋さん
で売ろう！」「それって図鑑じゃん」という声が上がったのである。
モンスターの世界は作品を越えて、さらに先へと歩み始めた。
まずは造形展での展示を図鑑のようにレイアウトし、子どもたち



写真-8 「造形展でのモンスター図鑑」

が制作中に語っていた「特徴」をそのまま子どもの言葉で添えた。まるで Show & tell を紙の上で再現するような展示だった。他クラスからも反響があり、特に年長児から「めっちゃ笑った」「図鑑面白かった」と言われると、子どもたちは自信を持ち「もっとつくりたい！」とさらに制作を始めた。その後、子どもたちの作品と言葉をパソコンで編集し、製本作業へと進んだ。最初はクラスに1冊だけ置いていたが、それを見た保護者から「手元に置きたい」「このまま終わらせるのはもったいない」という声上がり、最終的には保護者の協力によって、本物の「モンスター図鑑」として製本されることになった。子どもたちの発想が大人の心まで動かし、クラスの1年間の歩みが「本」という形で残っていく……。その姿は、子どもと大人が共に紡いだプロジェクトの力そのものであった。

モンスターを通して見えてくるのは、子ども達がそれぞれの生活経験や感情、人との関わりを元に想像の世界を構築していたということである。作品の中には、自己投影（自分の体験や感情を重ねる）、他者とのつながり（友達や家族、保育者をモチーフにする）、かわりの中での想像（他児との共同の物語を展開する）といった多様な表現の層が見られた。こうした姿は Show & tell の積み重ねによって培われた「語る」「聴く」「つながる」関係性の深まりを表している。モンスターづくりを通して、子どもたちは自己理解を深めながら他者との世界を共有していったのである。この子どもたちのモンスター図鑑の一例を次頁に挙げてみたい。

第4章 Show & tell が育んだ「語る力」と「つながる力」

4-1 子どもたちの育ち

「Show & tell」を1年間、ほぼ毎日のように続ける中で、子どもたちは「話す」力だけでなく、「聴く・質問する・やりとりする」という関係の中で、自分の言葉を育てていった。発表を通して「自分の思いを伝える」ことの喜びを知る一方で、友達の話を書く面白さにも気づき始め、次第に「対話のあるクラス」へと変化していった。ある子がよく口にした質問があった。「この特徴はなんですか？」という言葉だ。話を聞くと、「すごいところはありますか？って意味でしょ。図鑑に書いてあるよ」と教えてくれた。子どもたちはその「特徴」という言葉の響きを面白がり、やがてクラス全体で自然に使われるようになっていった。なので「物語」を語る中で「このモンスターは角が特徴で、角を使って氷をくだくんだよ。トナカイが水を飲めるようにしているの」など、自分の作品に極めて自然に「特徴」を見出し、意味づけし、説明し、自信を持って語っていた。気づけば、Show & tell で日々積み重ねてきたやりとりが、モンスターづくりの中で「自然な語り」として生

きていたのである。このような姿は、単に「話す」力の育ちにとどまらず、「考える力」や「言葉で関係を築く力」の育ちをも示していた。子どもたちは「語り」を通して他児と繋がり共に世界を広げていったのである。

①

ギーズ

にんげんとかくれんぼをすることが好きなモンスター そらをとぶことができるから あつというまに みんなのことをみつつけてしまう



おおよさ	17メートル(ウルトラマンくらい)
すみか	きょうとタワーのちかくのまち

②

モンスターちゃん

からだじゅうにピンクのイボがついていて そこからどくがでるうみのなかにいるぜんぶのさかなをいっしょにたおしてたべちゃう にんげんにはやさしいけど “ぶつとこおじさん” はオナラをするのでたおす



おおよさ	2メートル (このほいくえんくらい)
すみか	うみのもつともつととした

③

トサキセンセイモンスター

ふたこのなかよしモンスター たまにはけんかもある けんかをしているときに「コラー」というと、「すいません」といってまたさきせんせいのポケットのなかへもどる



おおよさ	はっけんしゃおとらととおなじくらい
すみか	さきせんせいのポケットのなか

④

チッポリーノ

トイレのなかに住んでいるから、ウンチがうえからべちゃっとおちてきてかおにオレン入るのウンチがついたままになっているともだちはウンチくん



おおよさ	まるまったうんちくらい
すみか	トイレのなか

⑤

サキセンセイモンスター

おこるとかわいい わきがひっくりかえるとごにこになる くんのタイヨウノースターとおもだちだから さきせんせいのからだにはいっていっしょにせーのでしんぞうをぬく



おおよさ	さきせんせいとおなじくらい
すみか	さきせんせいのおうち

⑥

オサケモンスター

おさけをのんでいるひとをみると おさけをうばってしまう そのうばったおさけを ちゃんのほっけんしたハートモンスターと トイレでこっそりむらしい



おおよさ	はっけんしゃ) のからだからい
すみか	おさけのなか

①「ギーズ」 このモンスターを作った子は、かくれんぼが大好きな子。「空からだったらすぐ見つけられるのになあ」と思っていたのだろうか。その思いが「空を飛べるモンスター」の発想につながったのかも知れない。そして興味深いのはその「大きさ」である。本人曰く「ウルトラマン位」で17m とのこと(実際のウルトラマンは約 40 メートルだが、そこはご愛嬌)。自分の身近なイメージと空想を結びつけながら、世界をリアルに膨らませていた。

②「モンスターちゃん」 このモンスターを作った子は、当時、水いぼができていた。作品には自分自身を重ねるような姿が見られ、まるで「自分の分身」のように感じていたのだろうか。このモンスターの大きさは「2メートル」。しかし本人は「この保育園くらい！」と説明していた。自分の知っている空間と結びつけながら、想像の世界を具体的に語るその姿が印象的であった。

③「〇〇くとサキセンセイモンスター」 この作品は2体一組の「双子モンスター」。大好きな弟(〇〇の中は弟の名前)と保育者をモデルにしており、普段のやり取りがそのまま会話として描かれている。日常の関係性がモンスターを通してユーモラスに表現されており、思わず笑ってしまう作品である。

④「チッポリーノ」 このモンスターは、子どもならではの「大好き」が詰まった一体。特に印象的だったのは、絵の具の塊を「上から落ちてきたうんち」に見立てたところだ。トイレやうんちの話題に大笑いする年齢ならではの発想が存分に表れており、本児の等身大の姿が感じられた。

⑤「サキセンセイモンスター」 このモンスターのすごいところは、「怒るとかわいくなる」「ひっくり返すと笑顔になる」という設定である。実際に作品を 180 度回転させると、表情が本当に変化するのだ。よくこの仕組みを思いついたものだと言われた。本児のひらめきと想像力が光る作品である。

⑥「〇〇オサケモンスター」 「お酒」というモチーフに、子どもなりの「大人へのあこがれ」が込められた作品ではないだろうか。(〇〇の中は本児の名字)⑤の「サキセンセイモンスター」と⑥の「〇〇おさけモンスター」は(一部抜粋の中では)、他児の作品とも関わりをもちながら、物語がどんどん広がっていったものである。「〇〇くんのモンスターと協力して心臓を抜く」「〇〇ちゃんのモンスターとこっそりお酒を飲む」など、友だちのモンスターを登場させながら新しいストーリーを生み出していた。こうしたつながりは制作の時間にとどまらず、日常の中でも続いており、「いま〇〇ちゃんのモンスターの〇〇と〇〇してるんだよ」「ね〜!」・・・、そんな会話が自然に交わされ、モンスターは子どもたちの想像の中で一緒に生きていた。

図-2 モンスター図鑑 (一部掲載)

4-2 子どもたちから学んだこと

この取り組みの中で、保育者として強く実感したのは、子どもたちの「やりたい」「伝えたい」という気持ちに、好奇心を持って耳を傾けることの大切さであった。子どもたちのひらめきや発想を、保育者が決めつけず共に楽しみ、時に迷いながらも寄り添うこと。そうして共に歩む中で、子どもたちの「世界」は驚くほど広がっていった。保育者が「教える人」として導くのではなく、「一緒に面白い仲間」として関わる時、子どもたちは心が動き、新たな発想を生み出していったのである。Show&tell から始まったこの一年の歩みは、まさに子どもと保育者が共に創り上げた一つの物語であり、私自身にとっても「保育の面白さ」を再発見する一年であった。

おわりに

この一年を通して子どもたちの「見せたい」「話したい」「聞いてほしい」という思いが世界を広げ、仲間とつながる原動力になることを実感した。モンスターというフィクションを通して、子どもたちは自分自身の「好き」や「個性」を語り、仲間との関係を深めていった。そして、その根底には、日々の Show & tell で育まれてきた「語る」「聴く」「つながる」関係があった。モンスター図鑑に残された言葉や作品の一つひとつには、子どもたちの今の思いと、確かな育ちの軌跡が詰まっている。それはまるで自分自身の性格や感情、願いを映す鏡のようであり、子どもたちはモンスターを通して“自分自身”を語っていたのかもしれない。この図鑑は、そうした一人ひとりの思いや心の成長を映した大切な記録である。この経験を通して何より感じたのは、「子どもたちの思いに、好奇心を持って耳を傾けていれば、保育は自然に広がっていく」ということである。「大人にとってささやかな日常の一コマでも、子どもたちにとってはとてつもなく大きな出来事」であるかもしれない。Show & tell から始まったこの一年の歩みは、まさにプロジェクト保育の本質、子どもと保育者が共につくる学びの物語を実感した。これからも、子どもたちの思いに寄り添いながら、共に感じ、共にわくわくし、共につくる保育を続けていきたい。

引用・参考文献

大豆生田啓友監修、おおえだけいこ著（2023）『子どもが中心の「共主体」の保育へ』小学館
大豆生田啓友編著（2014）『「子ども主体の協同的な学び」が生まれる保育』学研教育みらい
角尾和子編著（2008）『プロジェクト型保育の実践研究』北大路書房
秋田喜代美、松本理寿輝監著（2024）『遊び・学びを深める日本のプロジェクト保育 協働探求への誘い』中央法規出版株式会社 他